

【学校便り 3月号】

「最後にどんな目を入れるか・・・。」



立春を過ぎたとはいえ、春とは名ばかりの寒さ厳しい毎日です。それでも校庭の桃の木や梅の木、桜の木々の芽のふくらみや吹く風の香りに春の兆しを感じる今日この頃です。

さて、1月行く月、2月、逃げる月、3月去る月という言葉のとおり、年が明けてからあっという間にもうふた月が過ぎようとしております。皆さまにはお変わりもなくお過ごしのこととお喜び申し上げます。

さて、例年2月、3月の学年の終わり頃に話すお話が二つあり、その一つがこの話です。

「お早うございます。」

ちょっと寒いですが、校庭での月曜朝会は気持ちがいいですね。今の学年ももうすぐ終わり、春の準備で校庭の木の芽も膨らんできました。もうすぐ春ですね。

今日は、「最後にどんな目を入れるか。」という話をします。

お店に行くと、お正月の曲はとっくに終わっていて、節分も終わり、もう3月のお雛さま、桃の節句の曲が流れ、たくさんのお内裏様やお雛さまが、色とりどりに並んでいます。

テレビでも、桃の節句に向けて、お雛さまづくりに追われる雛人形の産地の様子をニュースで流していました。

その時に、心に残る場面がありました。それが、「最後に心をこめて目を入れる」という話です。

さて、ニュースではたくさんの人の手でだんだんにお雛さまが作られていく様子が映像で流されていました。

半年から1年くらいの時間をかけていろいろなおひな様が多くの人の手で作られていきます。体をつくる人、手足を作る人、着物を作る人。そして、作った着物を着せる人。頭を作る人、その頭に髪の毛を植える人、その髪の毛をきれいに結って冠をつける人。そして、体と手足と頭を組み立てる人。と、さまざまな役割の人が仕事をつなぎ、多くの人の手を経て人形が完成に近づきます。最後に顔を仕上げる職人さんに人形がわたります。

そして、そのなかでも最後の仕上げの、「目」を入れる作業の場面での職人さんの言葉「最後にどんな目を入れるか」が印象に残ったのでお話しします。

「体もでき、着物も着せて、きれいな顔に仕上がって、あとは目を入れるだけ。」

さて、この時が一番気を使う。手の動きひとつで、これまでのたくさんの方の努力や仕事の値打ちが決まってしまう。単純な仕事だけれども手の震える思いだ。

でもそれでは、目が入らない、仕上がらないので心を落ち着け、これまでの経験を

生かし、素直な気持ちで最後の最後に一気に目を入れる。この時、心に迷いがあると台無しになる。

たくさんの人間が半年も時間をかけて作った仕事が全部無駄になってしまう。だから、心をこ

め、気を落ち着けて、そして一気に目を入れる。最後にどんな目を入れるかということが、その人形に命を吹き込めるかどうかを決めるのです。」

このように、「最後の仕上げ」が、たくさんの努力を活かしたり、台無しにしたりするんですね。前にもお話ししたように、3学期は、「1月は行く月」「2月は逃げる月」「3月は去る月」。油断していると、あっという間に終わってしまいます。

皆さんの一年はどんな1年でしたか。最後の仕上げに、どんな目を入れて、どんな1年に仕上げましょうか。まだまだ油断できませんよ。

と、投げかけて話を終わります。いつも、目をまん丸にして、桃五の子達はよく話を聞いてくれます。

※ 去年はこの話をした後、いつものように子どもたちを見送っていると、低学年の子が話しかけてきました。

「校長先生、わたしは苦手だったことがたくさんできるようになったんだよ。一年間で、いっぱいできるようになったことがあるんだ。残りの3学期の間に苦手なこと見つけて全部できるようにするんだ。もうすぐ3年生だもん。」

(この子は今年もやっぱり、もうすぐ4年生。と張りきっていました。)

今年度も1年間ご理解とご協力を賜りありがとうございました。

盆踊り、運動会や第1回音楽会、学校公開等様々な場面でお励ましとご協力をいただきました。心より御礼を申し上げますと共に、引き続き、来年度も学校を挙げて子どもたちを温かく見守り育む『共育』の学校創りに励んでまいります。よろしくお願い申し上げます。

